

## 学科試験問題（初段）

1 「三つの間合」を書きなさい。（30）

間合とは自分と相手との距離をいう。間合には、一足一刀の間合、遠い間合、近い間合の三つがある。

- (1) 一足一刀の間合 - 剣道の基本となる間合で、一步踏み込めば相手を打突することが出来る距離であり、一步さがれば相手の打突をかわすことの出来る距離である。
- (2) 遠い間合（遠間） - 相手との距離が一足一刀の間合より遠い間合いで、相手が打ち込んで来てもとどかないが、同時に自分の打突もとどかない距離である。
- (3) 近い間合（近間） - 相手との距離が一足一刀の間合より近い間合で、自分の打ちが容易にとどくかわりに、相手の打突もとどく距離である。

2 「掛け声」の効用（ききめ）について述べなさい。（40）

- (1) 自分の気分を充実させる。
- (2) 相手を威圧する。
- (3) 自分の力を集中して、より以上の勢いを力を発揮させる。
- (4) 気剣体の一致をはかり、打突を正確にさせる。

3 日本剣道形を実施するときの「足さばき」で気をつけることを書きなさい。

- (1) 足さばきは、すべて「すり足」で行い、踏み込み足は使わない。重心を上下動かさず、滑らかに行うことが大切である。
- (2) 足の運びは、原則として前進するときは前足から、後退するときは後ろ足から動作を起こす。
- (3) 足のさばきは、原則として一方の足に他方の足が伴う。特に打突時の後ろ足は残さずに、前足に伴って引き付ける。

## 学科試験問題（二段）

1 剣道で「礼儀を大切に理由」について述べなさい。（40）

剣道を修練する上で、互いに心を練り、身体を鍛え、技を磨くためのよき協力者として、内には相手の人格を尊重して常に感謝の念を持ち、外には端正な姿勢で礼儀正しくすることが、剣道にとって極めて大切なことである。稽古や試合の前後の礼法を立派に行うことはもちろんのこと、終始、正しい心、慎みの心、敬う心といった礼の本体を離れることなく、素晴らしい剣道を創造していくうえで、礼は大切な要素である。

2 「残心」について説明しなさい。（30）

残心とは、打突した後でも油断することなく、相手の攻撃に対応できる身構えと気構えである。

- (1) 打突後に間合をとって、相手の攻撃に備える。
- (2) 打突後に適正な間合がとれない場合は、自分の剣先を相手の中心につけるようにして相手の反撃に備える。
- (3) 残心がないものは有効打突にならない。

3 「基本打突や技の練習で注意すること」を3項目書きなさい。（30）

- (1) 正しい姿勢で、気力を充実させ、互いに攻め合いから打突する。
- (2) 適切な間合から、打突の機会を的確にとらえ、大技で打突する。
- (3) 一打ちごとに充実した氣勢で、確実に気剣体一致の有効打突となるようにする。
- (4) 手先や腕だけで打つのではなく、充実した氣勢と体を伴って腰から打突する。
- (5) 打突後は身構え、気構えなどの残心を取り、次の打突に備える。

## 学科試験問題（三段）

1 「掛り稽古の目的」を述べなさい。（30）

掛かる側は、打突の成否などを一切、念頭に置かず、積極的に相手を責め崩して打突の機会をつくり、短時間のうちに気力、体力の限りを尽くして、全身を使って大きく伸び伸びと「しかけていくわざ」を用いて打ち込む。技術と心肺機能の向上を図り、気力や体力を練りあげる稽古法である。

2 「稽古で心がけなければならないこと」とはどのようなことか述べなさい。（40）

- (1) 竹刀の点検、準備運動、整理運動をはじめとした安全面に留意する。
- (2) 大きな目標や研究心をもって取り組む。
- (3) 礼儀作法を重んじる。
- (4) 立会いの「初太刀」を大事にして、一本一本をおろそかにしないように、常に旺盛な気力で、精魂を込めて稽古をする。
- (5) 基本に忠実に稽古をする。
- (6) しかけていく技を積極的に使って稽古をする。
- (7) 稽古後は反省し、工夫・研究を怠らない。

3 「試合稽古で気をつけること」を述べなさい。（30）

- (1) 正しい姿勢と正しい構えで行う。
- (2) 勝ちを誇示したり、不適切な態度をとらないようにする。
- (3) 充実した氣勢で、気構えを強くして、剣先を中心から外さないで攻め合う。
- (4) 安易に左こぶしを正中線から外すような防御態勢はとらないようにする。
- (5) 正しい鍔ぜり合いを行い、鍔ぜり合いからは積極的に技を出すか分かれるようにする。
- (6) 勝敗の結果や試合内容を反省して、更なる修練の課題を確認する。

## 学科試験問題（四段）

### 1 「剣道が上達するための要件」を述べなさい。（40）

「剣道の理念」や「剣道修練の心構え」についての理解を深め、自分なりの目標を持ち、一生が修行であることを自覚して、常に真剣な気持ちで修行をすることが大切である。また、素直な気持ちで師の教えに従い、基本と応用に熟達するよう修練し、稽古の積み重ねと心の工夫に努める。こうした鍛練的な実践と同時に、剣道を取り巻く理論的な研究を深め、形の習熟などによって理合を認識し、心身ともに健全な生活をおくることが大切である。

### 2 「構えと目付け」について説明しなさい。（40）

目付けは、良い姿勢を維持するための目の役割とともに、相手の動きに対して、常に有利な体勢を維持したり、相手の変化に対応するための目の動きのことをいう。目は相手の顔面（目）を中心に、全体を見るようにするのが基本的な方法である。

- (1) 遠山の目付け（紅葉の目付け） 一点を凝視するのではなく、遠い山を見るように、相手の全体に注目する。
- (2) 二つの目付け 特に相手の剣先とこぶしに着目する。
- (3) 脇目付け（帯矩の目付け） 相手の帯（腰）のあたりに目を付けて、相手と視線を合わせないようにする。
- (4) 観見二つの目付け 宮本武蔵のいう、心を見る「観の目」を強く働かせ、現象を見る「見の目」を弱く働かせて現象にまどわされないようにする。

### 3 「懸待一致」について説明しなさい（20）

「懸」とは相手を攻めたり打ちかかる攻撃の意味で、「待」とは相手の動きを冷静に見極めながら出方を待つ意味である。懸かると待つは表裏一体をなすものであり、攻撃中でも相手の攻撃に備える気持ちと態勢を失わず、受けにまわったときでも常に攻撃する気持ちでいることが大切である。

## 学科試験問題（五段）

### 1 「攻め・崩し」について説明しなさい。（30）

相手を攻めて何らかの変化や反応があり、構えの崩れや心に同様が生じたところを打突することが大切である。相手を攻めて崩すには、次の三つの方法がある。

- (1) 剣先によって攻める お互いが中段の構えで剣先を中心につけて攻め合っている場合は、お互いに打突の機会が得られない。そこで、相手の竹刀に対して、「触れる」「押える」「払う」「はじく」「張る」「捲く」などの剣先の働きにより、相手の剣先を中心から外して打突の機会をつくる。
- (2) 技によって攻める 相手が打突しようとする先に、自分から積極的に技をしかけることによって機先を制し、相手の構えを崩したり心に動揺を与えることで、自分に有利な打突の機会をつくる。
- (3) 気によって攻める 相手が打突しようとする兆しが出る前に、“打つぞ、突くぞ、抜くぞ”という、強い気迫で相手の打ち気を封じたり、削ぐなどして勝機をつかむ。

### 2 「一眼二足三胆四力」について説明しなさい。（40）

- (1) 一眼 相手と対峙したときは、まず相手の思考や動作を見破る眼力（洞察力）が最も大切である。宮本武蔵は「観見二様の目付け」として「観の目強く、見の目弱く」と教えている。
- (2) 二足 初心者ほど手先で打って足が伴わないものである。道歌に「立会いは竹刀でうつな手で打つな、胴造りして足で打て」と教えているが、すべての打突は足がその根本であり、足の出ない剣道は居付技として卑しまれている。
- (3) 三胆 胆は胆力である。四戒と云われる驚懼疑惑の四病を払拭して、一刀両断する勇氣と決断が大切である。
- (4) 四力 力は思い切った技、およびその技を発揮する体力や筋力などの身体能力である。

### 3 「日本剣道形修練の必要性」について述べなさい（30）

剣道形は、先人が英知を尽して創造したものであり、長い歴史の過程で、理合や精神面に深い内容を持つまでに発達したものである。日本剣道形を正しく継承して次代に伝えることは大きな意義があり、また、私達の使命でもある。

剣道形を繰り返し修練することによって、剣道の基礎的な礼儀作法や技術、剣の理合を習得することができ、さらに内面的な気の働きや気位といった剣道の原理原則をも会得できる。このように剣道形は、剣道における規範となるものであることを深く認識し、平素から日本剣道形の修練に努めることが大切である。